

# 優秀賞

## “無所属”の時が始まる

愛知県名古屋市長 小倉 一修

今年五月、会社を辞めた。大学を卒業し、地元のテレビ局に入社し、三十六年目に決断した。辞めて気づいたことがある。何かを辞めれば何かが始まるということだ。

今年八月、私はハロートレーニングのひとつ、「初心者のためのビジネスパソコン科」に入学した。ハロートレーニングとは、ハローワークが行う求職者支援訓練のことだ。

還暦を前に早期退職した私は、しばらくの間、仕事に就くつもりはなかったが、第二の人生を踏み出すには、パソコンスキルは必要だと思い、訓練校に入学した。スクールの期間は三カ月間。最初は「自己理解」の授業から始まり、「キャリアプランニング」、「応募書類作成」と再就職に向けた実践的なプログラムがしっかりと組み込まれている。パソコンスキルの習得を目的に

入学した私にとっては、いささか拍子抜けだったが、その点、クラス担任の女性講師は心得ている。

「再就職の基本は自己理解です。人生経験の豊富な皆さんですが、ゲームのつもりで体験してみてください」

講師は満面の笑みを浮かべながらそう言うと、「他己紹介」を始めるよう指示した。

生徒は十四人。見知らぬ者同士で、年齢もバラバラ。共通しているのは「失業者」という点だ。その「失業者」がくじ引きで、二人組に分かれた。

「他己紹介」では、コンビを組んだ相手にインタビューをする。前職や趣味などを聞き出して、相手の「人となり」について発表する。

私の組んだ相手は、女性だった。

名前は、木村さん。歳は三十代半ば。前職はアパレル関係の仕事をしていた。なるほど金髪がよく似合っている。金髪でラフなジャージを着ているが、崩れた印象はなく、ござっぱりとしている。耳のイヤリングがアメリカの国旗で、印象的だった。彼女の幼い子どもが国旗好きだから、と屈託のない笑顔で語る。さらに、お金がないので早く職を決めたい、とこちらが聞かないことまで木村さんは語った。

次は私がインタビューを受ける番だ。しかし、木村

さんはなかなか質問を発しない。気まづくなるといけないので、私から名前と前職について話を始めた。

「テレビ局で働いていたんですか？」

木村さんが目を丸める。私はエピソードを交えながら番組制作の現場について語った。インタビューというより、私の一人語りになってしまったが、木村さんの笑顔に釣られて、つい話し過ぎてしまった。

「それでは順番に発表してください」

講師がストップウォッチを手にして告げた。

ある日、私は妻と地元の菩提寺を訪ねた。お参りを済ませて、妻が手洗いに行く間、境内で待った。その日はお彼岸で境内は大勢の人で賑わっている。何軒か露店も出ていて、目で追っていると息を飲んだ。

お好み焼きを売る露店で店番をしている女性に見覚えがあった。金髪でジャージ姿、耳にはアメリカの国旗が揺れている。あの木村さんだ。彼女は露店の鉄板の向こう側に座っていて、時折お好み焼きをひっくり返す。

木村さんに挨拶するか…。しかし、私は彼女が浮かない表情でお好み焼きを見つめているのが気になった。少し考えて、私はその場を離れた。

翌日、木村さんは普段通り、教室の一隅に座っていた。教室の木村さんと境内で見た女性の姿と重ねる。やはり、昨日の出来事を彼女に聞くのは憚られた。

昼休みになった。手洗いで用を済ませて廊下に出ると、木村さんが立っていた。

「昨日、お寺にいましたよね？」

唐突に木村さんから言われて、私は息をのんだ。木村さん、気づいていたのか。

言葉を探る私を見て、木村さんは続ける。

「ありがとうございます。優しいですね。」

あまり人に見られなくなかったので、声をかけられなくてホッとしました。でも…

木村さんが息を継いだ間に、私が言った。

「わざわざ僕に言わなくても良いのに。」

もちろん他言するつもりはないけど

「あの店、父がやっていて、時々手伝わせられるんです。人前に出るのが苦手なのに」

木村さんは苦笑した。

午後からの授業が始まった。今日からは、再就職に向けて「応募書類作成」の講義だ。

木村さんは真剣に授業を受けている。スクールに通い始めて一カ月。入学前の予想とは違

う自分がいる。なんの縁もない者が集まり、再就職のために勉強する。どこにも属さない「無所属」の人々。前職でどんな仕事をしていようが関係ない。あるのは「人」であることだけ。そんな当たり前のことに気づき、嬉しくなる。

私は壇上の講師を見上げた。